

『サイリス』におけるバークリーの生命哲学

中野安章

論文要旨

本稿は、バークリーの最後の哲学的著作『サイリス』（1744）に固有の哲学的枠組みを、「生命哲学」という視点から描き出し、『人知原理論』（1710）の「非物質論」哲学とは異なる諸特徴がこの生命哲学に見て取れることを示したい。その考察の焦点は、万物を賦活する「生命原理」について、バークリーが『サイリス』でいかに説明するかである。最初に、『原理』の非物質論に基づく現象主義的枠組みで生命現象がどのように説明されたかを、第60–66節に基づき考察する。次に、『サイリス』で生命原理とされる酸の精気、空気について順に考察し、根源的生命原理である純粋な元素的火の四つの基本的特性を説明する。さらに、これらの考察に基づいて、『サイリス』の生命原理が『原理』の説明枠組みを超え出ること示したい。すなわち、『原理』では生命現象は現象主義的に解釈された機械論的枠組みで理解されたが、純粋な火はもはや現象主義でも機械論でも捉えられない。そして最後に、『原理』に見られるような生物の内的過程を生命現象の「記号」とする記号論的理解が、『サイリス』でも維持されるかを検討する。

キーワード【ジョージ・バークリー、『サイリス』、生命原理、純粋な火、記号】

緒言

『人知原理論』（以下、『原理』と略す）に代表される、初期の哲学に見て取れるバークリーの自然観は、簡単に言えば、現象主義として言い表すことができる。自然界の物体は、形而上学的に言えば、心の知覚対象としてのみ存在するもの、つまり観念として分類されるものであり、そして観念は現に知覚されるものか、あるいは現に知覚されないなら、何らかの法則に従って知覚可能なものである。自然界は観念と、その観念に秩序を与える自然法則から成るのであり、知覚対象である観念やそれが従う法則を生み出す原因となる物質は存在しないとされる。この現象主義が、『原理』に示されるバークリーの形而上学、すなわち「非物質論」から帰結する自然観を特徴づける基本的立場であると言ってよい。

ところが『原理』から34年後の『サイリス』の自然観は、現象主義ではない。『サイリス』は、自然界の内奥にある不可視の世界、隠れた構造を描写している。そして、自然物の不可視の内的構造の根源にある元素的存在者（それは「光」「火」「エーテル」と呼ばれる）について、バークリーは明確に知覚不可能としている。この点で、『原理』を特徴づけていたあ

の現象主義的自然観とは、明らかに袂を分かっているのである。しかし『サイリス』が描く自然の元素的存在者は、ただ知覚不可能というだけではない。それはまた、「能動的」存在者であり、自然界全体に生命を付与するとも言われている。『原理』における自然の構成素である観念は「知覚される」ものであり、かつ「無力」「受動的」(PHK 25)であった。ところが『サイリス』によれば、自然界の物体には知覚されない隠れた内的構造があり、しかもその内的構造は、元素的存在者の能動作用によって活気づけられ、維持されているものとして理解されるに至っているのである。そしてこうした自然観に立つ『サイリス』は、『原理』で否定されたはずの物質の存在を暗黙の前提とすることなしに読解することは困難であると思われる。

若き日の哲学的出発点を画した『原理』と、晩年の円熟期の著作であるはずの『サイリス』の間に、断絶と飛躍を見ないことは難しいだろう。そしてこれが、バークリー哲学全体に一貫した統一性を読み取ろうとする解釈者にとって長く困惑の種になってきた。ルースは、両著作の断絶に積極的意義を与えようとしたフレイザーやジョンストンに反対し、バークリー哲学の統一性を強く主張したが、その際に統一性を解釈するための視点はあくまでも初期の「非物質論」との連続性という点に置かれていた¹⁾。このルースの視点が、続く半世紀以上の間、『サイリス』への解釈者のアプローチを規定してきたと言えるだろう。しかし、『サイリス』に焦点を当てた近年の研究は、ルースの視点からより自由に、初期の「非物質論」との連続性という予断なしに『サイリス』に固有の哲学的枠組みを探索することを目指しつつある²⁾。ルースのような視点に立って、『原理』に示される非物質論哲学を絶対的基準として『サイリス』をそれに従属させるなら、『サイリス』の多様な解釈の可能性を狭めるものとなりかねない。本稿もまた、『サイリス』の新たな解釈の可能性を求めて、ルース的な統一解釈の予断から自由に、この著作に固有の哲学を探ってみようとするものである。

それでは、非物質論という予断を離れて『サイリス』に固有の哲学を取り出すには、どのような視点に立った解釈が必要となるであろうか。『サイリス』は、著者自身も認めるように「粗削りの試論」(S 297)である。そこではタール水の製法・効能という実用的関心から、自然哲学的探究と、形而上学的・神学的思弁へと拡散していく雑多な思考が、古代の知者たち及び近代の哲学者たちからの引用傍証を頻繁に交えつつ、緩やかな糸で結び合わされている。しかしそれにもかかわらず、『サイリス』を読み解く鍵となる哲学的枠組みを設定することは、可能である。本稿では、その枠組みを「生命哲学」に定めたい。『サイリス』を解釈する鍵となる視座を与えるのは、その生命哲学なのである。『サイリス』の描く自然界はその全体が生きた動物に喩えられ、そこでは太陽から来る生命の源となる元素が大気と地上を遍く経めぐり循環し、生成、成長、腐敗の生命過程が循環する。『原理』の現象主義からの離脱如何という点も、こうした自然界の生物アナロジー、元素の循環、生命過程といった有機体的自然観との関係で理解される必要がある。『サイリス』の特異性と見えるのは、自

自然界の物体に内在する不可視の能動的な元素的存在者を認める点にあるが、この元素的存在者とは、植物や動物や人間、そしてそれらがその上に居住し、それらを包摂する地上世界全体を賦活する「生命原理」として導入されるものである。

そこで本稿の目標は、生命哲学という視点を導きの糸としつつ『サイリス』の自然観の基本的特徴を素描し、それを『原理』の現象主義的自然観と対比させて論じることにある。考察の焦点としたいのは、『サイリス』が植物を題材にして自然界を賦活する三つの「生命原理」についていかに語っているかであり、その上でこれを、『原理』における生命現象についての説明と対比することである。『原理』には、生命現象を扱う箇所はほとんどないが、まとまった論述が一箇所だけある。この箇所は、パークリーが現象主義的な枠組みの中でいかに生命現象を扱うかを示しており、『サイリス』の生命哲学と比較するための参照軸として最適である。この『原理』における初期の生命現象の説明を踏まえ、『サイリス』の生命哲学をこれに對置し、両者の相違点がどこにあるかを探っていくことによって、『原理』に代表される初期の哲学と『サイリス』の間にある非連続性を明確にすることができるものと期待できる。こうして生命哲学という視点から、『サイリス』に初期の『原理』とは異なる哲学的枠組みがあることを明らかにし、非物質論哲学からの統一的解釈という呪縛から解放された固有の哲学的枠組みによる『サイリス』解釈の可能性を開くことが、本稿の目標である。

以下では、まず第1節で生命現象に関する『原理』の議論を検討し、そこでの植物・動物の観察可能な生命現象とそれらの隠れた内部機構との関係を見る。『原理』の段階では、非物質論から帰結する現象主義の枠組みの中で生命現象が扱われ、植物・動物の内部機構と現象の関係が「機械論的法則」に従うとされる。次に第2節では、『サイリス』に考察を移し、植物の生命原理である「酸の精気」と、地上の生物を取り巻き、生命原理を循環させる「空気」に関するパークリーの議論を見る。『サイリス』では、これらの生命原理は非-機械論的なものであるとされる。第3節では、酸の精気、及び空気に含まれる本質的成分であり、かつ根源的な生命原理とされる「光」「火」「エーテル」について、それがどのような存在者なのかを四つの観点から吟味する。最後に第4節では、第3節の考察を踏まえ、『サイリス』の生命哲学の根幹を成す「光」「火」「エーテル」が初期の『原理』と比較して、現象主義、機械論哲学、そして生命現象の記号論的理解に関して、異なる枠組みの中で解釈される必要があることを論じる。

1. 『原理』における機械論的自然観

『原理』の中で生命現象が考察されるのは、第60-66節にかけてである。この箇所では、非物質論に対する第11番目の反論として、植物や動物の内的機構をどのように理解するべ

きか、という疑問が取り上げられる。パークリーが『原理』の冒頭部分(第1-33節)を費やして確立した、非物質論の二つの主要テーゼは、

- (1) 「世界という巨大な建造物を構成するあらゆる物体は、心の外に自立して存在することなく、それら物体が存在するとは知覚されること、あるいは知られることである」(PHK 6) ということであり、そして
- (2) 心の知覚対象である「観念」(あらゆる物体はこの観念だけから成る)は、「明らかに非能動的(visibly inactive)で、そこには力(power)や作用力(agency)はまったく含まれない」(PHK 25)、したがって(その観念だけによって構成される)すべての物体も同様である、

ということであった。そこで、植物や動物に観察される、栄養摂取、成長、運動、生殖などの多様な生命現象には、それを維持する目に見えない内部機構が存在し、その内部機構が生命体の特徴づける現象を「生み出す」という、われわれの共通理解はどうなるのかという疑問に、パークリーは答えねばならない。

ここでパークリーが想定している反論の趣旨は、もし物体が観念であるなら、植物・動物の観察されない内的機構は存在しないだろう、ということではない。パークリーは、「観念」という身分で内的機構が存在する、ということ認める。植物・動物の表皮を切り開いたときにそれが知覚される限り、知覚対象として、つまり「観念」として存在する。これを前提した上で、そのような観念の用途は何かを問題にするのである。つまり、反論の趣旨は、生命体の内部にある構造は、それらが観念であり、観念であるゆえに因果的産出力がないのだとすれば、何のために存在するのか、というものである。すなわち、一方に表層面で植物・動物の観察される成長と運動があり、他方には解剖が露わにする内部機構があって、両者に因果関係がないとするなら、後者の内部機構には(観察される生命現象との関係で)どんな目的が割り当てられるか、ということである。

この反論に対する答えは、61節から66節までの間に、多くの言葉が費やされ説明されるが、パークリーの応答の基本線は、次の一節に見て取れるだろう。

[植物や動物、時計などの] それら諸部分や諸器官の組み立ては、何らかの結果を生み出すために絶対に必要だというわけではない。しかし、自然法則に従って規則的、恒常的に事物を生み出すには必要なのである。自然の諸結果のすべての連鎖を通じて、ある一般的諸法則が貫いている。これらの法則は、自然の観察と研究によって習得される。…至高の作用者の御業が、こうした規則的で恒常的な方法に従ってなされることには大きな効用があり、またその効用は明らかである。…[自然の] 諸部分のある特殊な大き

さや形や運動や配置は、ある結果を生み出すために絶対に必要ではないが、一定の機械論的自然法則 (the standing mechanical Laws of Nature) に従って生み出すためには、必要なのである。(PHK 62; [] 内は引用者による補足)。

上の引用箇所を示されたパークリーの応答では、生命体の隠れた内部機構を、「観念」の知覚における法則性を担保するものとして、理解しようとしている。つまり、生物の栄養摂取や成長や運動は、ある一定の法則性に従っていることが観察されるが、その法則性とは、生物体内部に観察される組織や器官と、表層部で観察可能な生命諸現象との間にある一定の規則的対応関係である。こうした内的機構と成長や運動という現象の対応関係を指摘することによって、多様な生命現象が法則性をもつものとして説明されることができる。また、生命諸現象が一定の法則性をもつことは、この法則性の知識に基づいて、内的機構を適切に調整することによって生命現象を操作できるという、実践的効用とも結びつく。つまり、生物の内的組織の各部分に対しておこなう「あれこれの行為からどんなことが期待できるか、またあれこれの観念を喚起するにはどんな方法を取るのが適切か、に関する豊かな知見」が得られるのである (PHK 65)。そしてこれが、解剖によって明らかにされる生物の複雑で精巧な組織や器官が、何らの因果的な力や作用力をもたないにもかかわらず、その存在がそのために必要とされる「用途 (use)」であり「目的 (purpose)」であると言われる。

このように『原理』のパークリーにとって、植物や動物など生物の内的構造は法則性の相関物であり、それはちょうど算術における0から9までの数字が、十進法による表記や演算規則の相関物である (それによって多様な数の表示や加減乗除などの計算が可能になる) のと同じである。この文脈で、パークリーが観念を「記号 (sign)」として扱う (PHK 65) のも、観念どうしの法則的關係を言い表すためであり、少数の観念の規則的な組み合わせが多数の新たな意味を表すのに用いられるという趣旨であった。そこで、60節における反論に対するパークリーの答えは、植物や動物の組織・器官は「記号」としての役割を担い、観察可能な生命現象が従う一定の法則性を表示するために、またそれによって行為のための予見や操作を可能にするために存在している、というものになる。すなわち、因果的な力を持ち作用する「原因」という見方に代えて、そのような力と作用をもたず単に法則性の担い手となる「記号」に読み替えるのである。

さらに、これと並んで注意すべきは、ここで「記号」として捉えられた生物の内的構造に適用される法則について、「機械論的 (mechanical)」と言われる点であろう。これは60節において生物が「時計」という機械製作物とのアナロジーで考察されていること、さらにはこのアナロジーを自然界全体にも拡張して、「自然の時計細工」について語っていることと呼応している。生物の観察可能な生命現象が、その内部の機構との関係において示すところの法則とは、とりわけ「機械論的自然法則」を指しているのである。したがって、生物の解

剖学的構造が「記号」であるとされるとき、それは特に「機械論的」法則に従って解釈されるべき記号だということになる。この点は、65節最後でのパークリーの答えの要約にも見取れる。すなわち、「観念が機械装置に、すなわち技巧的で規則的な組み合わせに形成される理由は、文字を組み合わせて言葉を作る理由と同じ」であり、それは一定の規則に従って「少数の根源的観念 (a few original ideas) に多数の結果や作用を表すようにさせる」ためである。そしてその「根源的観念」として挙げられるのは「形 (figure)」や「組織 (texture)」なのであり、これらが典型的な「機械論的」性質であることは言うまでもない。

以上から、『原理』60-66節に読み取れる生命現象に関するパークリーの立場を、次のようにまとめておきたい。第一に、観察可能な生命現象を生み出す生物（植物と動物）の内的機構は、生命現象の法則性を担保する「記号」という役割を与えられる（それと同時に、生物の内的機構が「記号」であるということは、それによって生命現象を予見し操作するという実践的効用をもつものとして理解される）。第二に、生物は「時計」のような機械とのアナロジーで理解され、生命現象は「機械論的自然法則」に従うものとされている。

2. 『サイリス』の有機体的自然観と「生命原理」

『原理』のパークリーは、自然はすべて観念から成るという現象主義の基本線を維持しつつ、機械論的自然観に対して全面的批判を展開することはなく、むしろ一定の融和的態度を維持しているのが特徴的である。パークリーが批判的態度を取るのには常に、機械論の因果論的側面（及びそれと一体の還元主義）に対して、つまり機械論的説明において言及される形、大きさ、固性、運動など「機械論的」性質（あるいはロックの言う「一次性質」）が、因果的作用力をもって自然現象を生み出し、そして多様な自然現象（特に色、音、匂いなどの「二次性質」）はすべてそれらの性質に還元されるという主張に対してである。『原理』においては、機械論の因果論的 (causal) 側面と法則論的 (nomological) 側面がはっきり区分された上で、前者を否定しつつ後者を肯定的に扱う（「原因」を「記号」に読み替える）という姿勢が一貫して取られていたと言ってよい。

ところが『サイリス』には、この点における明らかな態度の変化が見取れる。

確かに前世紀の粒子論哲学者たちのある人々 (some corpuscularian philosophers of the last age) は、この世界の形成と、そこに生じる諸現象を、少数の単純な機械論的諸法則によって説明しようと企てた。しかしもし我々が、被造世界の諸部分を成す鉱物、植物、動物における様々な自然の生成 (generations) を考えるならば、それらのどれ一つとして、これまで単なる機械論的諸原理によっては説明されなかったし、説明されることができないと論定する理由を見出すだろう。(S 232)

ここで「単なる機械論的諸原理によつては (on principles merely mechanical)」という文
言に言い表されるのは、機械論の全面的な否定でないことは確かである。植物は「複雑な機
構 (a complicated machine)」(S 35) であると言われているのを見ると、上で見た『原理』
65 節における植物の組織や器官の機械的アナロジーは、『サイリス』においても維持されて
いるように見える。しかし、上の一節を見ると、植物、動物の「生成 (generations)」につ
いて、「機械論的諸法則」による説明の可能性が明確に否定されていることに注意したい。
この点は、既に見た『原理』の論述からはまったく予期されない展開である。

植物・動物の本質的な原理は、機械論的なものでなく、機械論的法則の下には包摂されな
いという論点は、『サイリス』で初めて現れるものである。『サイリス』で探究されるのは、
タール水への関心から発する、その生成器としての植物機構と、さらにそこから動物も含め
た生命一般の考察、すなわち生成、成長、腐敗という生命過程であり、そしてこれら生命循
環の基底には非機械論的な「生命原理」があるというのが、この著作におけるパークリーの
自然哲学を特徴づけている基本的立場である。地上での生命諸現象を司る非機械論的な「生
命原理」として『サイリス』で論じられるのは、酸の精気、空気、そして太陽から発出され
地球に達し、地上を循環する「光」「火」という元素である。そこで以下において、これら「生
命原理 (the principle of life)」³⁾ を順に見ていきたい。

『サイリス』というパークリーの最後の哲学的著作の端緒が「タール水」精製への関心に
発することは、その序文に述べられている通りである。そのタール水が「健康に有益な」も
のとされるのは、パークリーが自ら実験したという裏付けもあるにせよ、その背後には思弁
的な自然哲学の支えもあるわけであり、これが第 29-151 節にかけて、植物生理学から植物
分泌液が含む「酸」や「塩」の化学、及び植物液の生成を助ける「空気」の化学、さらに光
の自然哲学・形而上学へと展開されていくことになる。ここで提示される「植物の生命」に
関する思想にはパラケルスス派の医化学 (iatrochemistry) にまで遡りうる要素が見出され
るのであり、したがってルネサンスの錬金術思想との繋がりも明らかに見て取れよう。しか
しより直接には、パークリーが引用しているように、グリュエーやヘイルズといったロンドン
王立協会の実験哲学者たち、オランダの化学者プールハーヴェから、議論のための素材を多
く受け取っていると思われる⁴⁾。

パークリーによれば、タール水が解毒や消炎などのさまざまな薬効をもつのは、その中に
「生命原理」あるいは「魂 (soul)」⁵⁾ が浸透しているからである。植物の「魂」を成すのは「酸
の精気 (acid spirit)」であり、それは各種の植物に特有の「香り」と「味」をもっているが、
それは通常は単独で存在しておらず、硫黄質の油分と結合して植物の樹液のうちに存在す
る。酸の精気は、ある種の「揮発性の塩 (volatile salt)」なので水溶性があり、タール水は
水を溶媒として、松やモミの樹液から酸の精気を分離して得られる。つまり、硫黄質の油分
を含む松脂を、冷水の中で攪拌して沈殿させ、酸の精気だけを上澄みとして捕集するのであ

る。しかし、この精気はそもそもどのようにして植物の内部で作られるのか。『サイリス』でパークリーが描くところでは、植物の生命である精気の生成は、地の植物と天との協働作業の産物なのであり、これは小世界（マイクロコスモス）と大世界（マクロコスモス）の調和的協働として思い描かれる。つまり、植物の生命を維持する生命原理は、植物と、それを取り巻く空気と太陽光といった地上の物質循環との、相互作用によって生み出されるのである。

さて、松脂を始めとする植物の樹液は、樹皮に運ばれてそこで蓄えられ、外に分泌されるが、樹液は次のような過程で作られると説明される。パークリーは、「自然の化学 (the chemistry of nature)」という言葉を用いながら、植物を自然の化学工場に喩える (S 30)。植物の内部には、動物と同じように、体内に樹液を運搬する導管や脈管が根から幹を通過して葉や蕾や花まで走っており、そこには「栄養管」「分泌管」「排出管」が区別される (S 31)。動物の血液循環のように、植物の体内には樹液が循環するが、植物の場合、それは心臓の収縮拡張によるのではなく、弾力をもつ繊維から成る脈管の中を通過し、空気によっておこなわれる。つまり、脈管の中で、空気が熱せられて膨張したり冷やされて収縮したりして、それに応じて根から吸収された栄養液が複雑に張り巡らされた管の中を上昇し、あるいは下降する。植物の体内を運動する樹液の一部は、空気が運ぶ熱によって希薄化され、管の中をさらに上昇して体外に蒸発し、残りの部分は冷気によって冷やされ、液体の粒となって管の中を下降する (S 32)。このように空気的作用によって樹液の上昇、下降、蒸発、凝縮を繰り返しながら、様々な種の植物は、その特有の配管システムに応じて特有の樹液を生産する。

ところで、パークリーによれば、各種の植物に特有の香味を与える「酸の精気」は太陽の光に含まれており、それを植物が選択的に体内に取り込むのだという。

植物の芳香は、色がそうであるように、太陽の光に依存していると思われる。光が生み出されるに際しては、対象の反射する力が太陽と協働するように、香りを生み出すに際しては、植物の牽引する有機的な力 (the attractive and organical powers) が太陽と協働するのである。そしてニュートン卿の実験から、すべての色が太陽の白色光に潜在的にあって、光の射線が物体の引力と斥力によって分離されると「各色が」現れ出ることが示されたように、植物の「体内で」醸成された樹液がもつ特有な性質は、太陽光の中に潜在的ないしは優勝的に (virtually or eminently) 含まれており、植物の毛細管の特有な力 (the peculiar powers of the capillary organs) によって、光の射線の一部を牽引し (attract) 吸収して (imbibe)、射線を分離することで現れ出るように思われる。このような射線の分離からある「特定の」香味や性質 (flavours and qualities) が作り出されるのであり、それはある「特定の」光の射線が、反射によってある「特定の」色を生み出すのと同じなのである。(S 40; [] 内は引用者による補足)

樹液の精製においては、植物は化学工場に喩えられたが、ここでは、それは光を屈折するプリズムに喩えられているように見える。ニュートンの有名な発見は、太陽光をプリズムを通して屈折させ、白色光が赤から紫まで、それぞれに固有の屈折率をもつ射線の合成であることを示した。パークリーは、各種の植物がもつ「香味 (flavour)」の形成を、太陽光に含まれる特定の粒子を選択的に取り込むこと、すなわち各種の植物が毛細管の引力によりその種の植物と親和的な粒子だけを引き寄せることとして、理解していると思われる。これは各種の植物が、プリズムのように、それぞれに固有の機構に応じて光の成分を析出する役割を果たすということである。この香味は、植物の生命である「酸の精気」に備わるものであるから、パークリーの趣旨は、酸の精気が太陽光から発出されて植物に取り込まれ、植物を生かすということになる。「植物の生命の形相、魂、原理 (the forms, souls, or principles of vegetable life) は、光、あるいは太陽の発出物の中に存在する。この光は大世界 (macrocosm) に対して、動物精気 [= 酸の精気] が小世界 (microcosm) [= 植物] に対してもつと同じ関係にある」(S 43; [] 内は引用者による補足)。

『サイリス』の生命哲学にとって重要な、もう一つの生命原理は「空気 (air)」である。パークリーによれば、空気は「受容器 (receptacle)」であるとともに、「一般的作用者 (general agent)」でもあるとされる。空気が受容器であるというのは、空気が地上の植物や動物という生命体を取り巻いて、そこから放出される諸粒子を受けるということであり、そこでは化学的作用もおこなわれると言う。

われわれの地球を取り巻く空気あるいは大気は、地上界全体、すなわちすべての植物、鉱物、動物から出る、あらゆる能動的な揮発性の粒子 (active volatile parts) からの混合を含む。何であれ発汗し、腐敗し、発散するものは、空気を満たし、そして空気は、太陽の火からの作用を受けて、それ自身の中に、あらゆる種類の化学的作用 (chemical operations) を生じ、そうしてそれが腐敗物から受け取った塩や精気を、再び新しい生成物 (new generations) に与えるのである。(S 136)

かくて空気も「自然の化学」の担い手であり、宇宙からの太陽光と地上の生物を媒介して、天と地との共同作業を促進し諸々の生命体を維持するという役割を担った生命原理なのである。すなわち空気は、植物や動物から放出された粒子を受け取り、太陽の光と熱を利用して自らのうちに化学反応を進行させつつ、生物の生成、成長から腐敗を経て、さらに新生へと至る循環を仲立ちする。ところでニュートンやヘイルズによれば、空気は「永久空気 (permanent air)」と呼ばれる単一粒子から成る（そこには水蒸気やさまざまな物質の発散気も入り混じる）とされる⁶⁾が、パークリーはこれと意見を異にし、「純粹で単純な空気の元素のようなものはない」(S 150) と言う。すなわち空気とは、異種の揮発性粒子の混成体であ

る。「空気は他と区別された元素ではなく、最も異質的で互いに反対でさえあるものの、集積あるいは混合 (mass or mixture)」(S 147) なのである。

そうした混成体としての空気の構成要素は、大きく分けて二つある。「一つは、より粗大な粒子 (more gross [part])、地上の物体 [植物、動物、鉱物] から生じそこから取り去られたものである。もう一つは、微細な精気 (a fine subtle spirit) であり、それによって前者 [より粗大な粒子] が、揮発性と弾性を与えられる」(S 150; [] 内は引用者による補足)。空気が「一般的作用者」と言われるのは、この二つの両方に関わる。しかしより重要なのは、後者の微細な精気であり、次節でさらに見るように、パークリーはそれを「光」「火」と呼び、根源的な生命原理であるとする。トリチェリの大気圧の実験以来、空気の様々な性質が研究されてきた。その一つは呼吸と燃焼に必要な何かが含まれる (今日のわれわれはそれを「酸素」として知っている) というものだが、これはメイヨウの実験によって示された⁷⁾。また、ボイルからニュートン、ヘイルズへと研究が発展してきた「弾性 (elasticity)」という性質がある。ニュートンは『光学』の疑問 31 で、空気を、引力と反対の原理である「斥力 (repulsion)」によって生成されると示唆した⁸⁾ が、ヘイルズはこれを『植物計量学』で発展させて、空気の弾性をその構成粒子の斥力によって説明する考えを提示した⁹⁾。パークリーは、ヘイルズの説から多くを学んでいると思われるが、ヘイルズが「永久空気」を想定し、その斥力に植物や動物を含む自然界全体の活動の源泉を見たのに対して、パークリーはそれを、微細な精気としての「光」「火」に見ようとする。パークリーによれば、生命や燃焼も、また空気の弾性も、粗大な粒子とともに空気の中に含まれる微細なエーテル流体、「光」「火」の作用による。つまり、地上の物体や生物から放出された雑多な粒子の塊が、「ある能動的で微細な実体に牽引 (attract) されて、弾性と揮発性を獲得することによって空気になる」(S 147) ののである。

3. 根源的生命原理—純粋な火 (「光」「エーテル」)

これまでは「酸の精気」と「空気」という二つの生命原理について見てきたが、『サイリス』では結局のところ、これらは一つの根源的な生命原理に、すなわち微細精気としての「光」「火」の働きへと還元される。植物が各種に固有の香味を生む酸の精気を生成したり、固体や液体の構成粒子が揮発性を獲得して「より粗大な粒子」を空気中に発散・放出させたり、あるいは空気はその弾性によって膨張したり、レンズで集光すると紙が燃えたり、さらには火山が噴火したり…というような地上の様々な諸現象の根源には、パークリーが「純粋な火 (pure fire)」「元素的火 (elementary fire)」「光の実体 (substance of light)」「エーテル (aether)」「エーテル精気 (aetherial spirit)」と呼ぶ不可視の元素的存在者の作用がある。したがって、これまでに考察した酸の精気や空気は、この不可視の元素にその諸作用が依存

しており、派生的二次的に「生命原理」であるにすぎない (S 191)。この根源的生命原理に与えられる上述の多様に異なる呼び名は、パークリーがエジプト、メソポタミア、ギリシアといった「古代の知恵」にその源泉をたどる宇宙論に由来するとともに¹⁰⁾、より直接には18世紀前半の物質理論に由来する。すなわち、「(元素的) 火」はプールハーヴェに、そして「エーテル (精気)」はニュートンに由来する、物質理論からの影響を示唆するであろう¹¹⁾。

では、パークリーが「光」「火」「エーテル」と呼ぶ微細な精気は、どのような性格の存在者なのか。以下では論述上の便宜を考慮して、本文中で言及する際は主として「純粋な火」という呼称に統一して用いることにしたいが、引用文中では、しばしば異なる名称で言及される点に留意していただきたい。

まず、純粋な火の基本的特徴を四つ列挙すると、(1) 知覚不可能である、(2) 微細な粒子から成る流体である、(3) 自然界で最も強い弾性をもつ、(4) 自然の過程の中では破壊されない (「実体 (substance)」である)、である。本節では、純粋な火のこれら四つの特徴を簡単に説明して、次節で(1)(2)を中心にして、『サイリス』の自然観と『原理』のそれとを比較する手掛かりとしたい。

(1)については、「この純粋な火、エーテル、あるいは光の実体は、われわれのすべての感覚にとってそれ自体では不可視で知覚されないもの (in itself invisible and imperceptible to all our senses) であり、熱や炎や膨張という結果によってのみ知覚される」と言われる (S 169)。純粋な火、あるいはエーテル精気は、煙や炎を発生して燃焼をおこなう「通常の火 (culinary fire)」とは区別される (S 190)。通常の火は、純粋な火が「基体 (subject)」に、すなわち被作用体としての可燃性物体に作用したものである。通常の火は、「燃えている物体 (ignited body)」であり可視的なものだが、純粋な火、エーテル精気は、不可視である (S 198)¹²⁾。純粋な火の不可視性、知覚不可能性は、この存在者が「純粋 (pure)」 「元素的 (elementary)」と言われることと対応している。可視的世界を構成するものは様々な種類の粒子の混成体 (エーテル精気はそれら粒子と結合して分離、発散、膨張などの作用をおこなう) であり、そのようなものとして「混合物体」であるが、純粋な火は、「純粋」である限りは、すなわち他の粗大な粒子と結合しない「元素的」なものとして存在する限りは、その本性上、不可視なままにとどまる。端的に言えば、それは理論的存在者であり、原理的に知覚不可能なのである。

(2)幾つかの箇所、純粋な火は「粒子 (parts, particles)」である、と言われる (S 151, 162, 165, 202)。しかし、それは単なるばらばらの粒子でなく、その作用の基本的様態において流体の性格を示すものである。純粋な火が有機体や物体に作用することが、しばしば「浸

透 (permeate)」「貫入 (penetrate)」「動揺 (agitate)」という言葉を用いて記述される。これらの作用様態を記述する言語は、典型的な機械論的作用を記述する言語である「衝突 (collision)」「衝撃 (impulse)」「粒子の表面における瞬時的作用」とは異なっている。この点については、次節でより詳しく考察することにしたいが、パークリーは、純粋な火のこうした「流体」としての作用様態を、その基礎的レベルでは、ニュートン以後の物質理論における「引力」「斥力」で主として理解しているように思われる。

(3)上の(2)で触れた「流体」という性格にも関連するが、「弾性 (elasticity)」という性質によって、純粋な火は遍在する作用者として世界全体に浸透し、生命体を活気づける原理となる。この点に関して最も雄弁な一節を引くなら、

このエーテルあるいは純粋で不可視の火、あらゆる物体の中で最も精妙で、最も弾性的なものは、全宇宙に浸透し膨張していく (pervade and expand itself) ように思われる。…この力ある作用者 (this mighty agent) は至るところに存在し、もし最高の叡智に統制され支配されていないなら、直ちに働き出そうと待機している。常に休みなく運動し、可視の世界全体を活気づけて生きたものとし、生み出すとともに破壊し、自然の様々な過程を区切り、…生成と腐敗の絶え間のない循環を維持する。その運動は極めて迅速であり、その本性は極めて精妙で貫入するもの (subtle and penetrating) であり、エーテルは世界の滋養の魂 (the vegetative soul) あるいは生命精気 (vital spirit) にほかならないと思われる。(S 152)

ここで「エーテル」「純粋な火」について語られることは、既にプールハーヴェが「火」について語っていたこととほぼ一致する。プールハーヴェにとっては、「純粋な元素的火」とは、自ら運動する能動的な力を持ち、自然界で最も大きな弾性を持ち、それによってすべての宇宙空間の隅々まで広がるものであった¹³⁾。そして、純粋な火の弾性は、その構成粒子のもつ「斥力」に由来するとされる。すなわち、他の粒子は「引力 (attraction)」しかもたないので、凝縮して塊になり固体を形成するのに対して、純粋な火だけは「斥力 (repulsion)」によって弾性を持ち、互いに反発しあい自己膨張するとともに、他の粒子と結合してそれらに弾性を与え物体を活性化させ、世界における物質循環を引き起こすのである¹⁴⁾。

(4)については、純粋な火は、「自然の経過によっては生成も破壊もできない (ingenerable and incorruptible by the course of nature)」(S.198) と言われる。先に見たように、パークリーにとっては(「永久空気」を想定したヘイルズと異なり)、「空気」は物体から発散する異種の粒子の混成体にすぎず、それら粒子が純粋な火と結合することによって、空気に帰せ

られる弾性が生じる。したがって空気は「実体」ではないことになるが、これに対して火は恒常的に存続する実体である。(ただし次節の最後に見るように、純粋な火は単一粒子ではなく異種の粒子から成る。)

4. 『原理』から『サイリス』へ—生命哲学的転回

以上で見た生命原理の考察を踏まえ、『サイリス』の生命哲学について、第一節で見た『原理』との相違点を考えてみたい。『原理』では自然界全体が「観念」によって構成されるという現象主義的立場を基本的枠組みとして、この枠組みの中に機械論的自然観を取り込もうとしていた。そして、生命現象については、植物と動物の内的機構が「時計」という機械とのアナロジーで捉えられ、それらの内部の組織・器官は、時計内部の歯車や発条と同じく、観察される生命現象の規則的産出を担保する(しかし内在的力是否定される)「記号」としての役割を担い、「機械論的諸法則」に従って生命現象を指示するものであった。

それでは、『サイリス』に言われる「生命原理」、すなわち、酸の精気、空気、純粋な火は、『原理』のような現象主義的に解釈された機械論の枠に収まるのであろうか。まず、現象主義との整合性について考えよう。『原理』の現象主義は(ロックを継承した)観念説の枠組みの中で展開され、感覚知覚の対象はすべて「観念」とあるという立場を取っていたが、『サイリス』にはこのような観念説はもはや見られない。『サイリス』では、感覚知覚の対象は「現れ (appearance)」「現象 (phenomena)」と呼ばれるようになる。したがって、ここでは酸の精気や純粋な火などが観念と見なされるかどうか、という問いは成立しないのであり、それらの生命原理は「現れ」「現象」と見なされるかどうか、と問うことになる。結論から言うなら、それらの生命原理は「現れ」「現象」としては扱われない。『サイリス』のパークリーによれば、各種の植物の固有生命を成す酸の精気は、それ自体では「極めて微細で精妙な精気」(S 121)であり、「極めて捉え難く、最も正確な観察者のあらゆる濾過や精査から逃れる」(S 126)とされる。それは植物が太陽光から純粋な火を取り入れ、その体内で「希薄な揮発性油 (thin volatile oil)」と結合して作られるが、その揮発性油のもつ特有の芳香や味によってその存在が知覚されるにすぎない。この芳香をもつ油は、空気に晒されると酸の精気を放出するが、放出に伴う油の量自体の減少は知覚されない (S 121)。明らかに、このようなものは観察可能な「現象」の枠外にあるだろう。「空気」については、先に見たように、物体から分離した粒子の混成体であって、それらは酸の精気や純粋な火よりは粗大であるが、観察可能か否かについては何も言われていない。純粋な火に至っては、明示的に「不可視」「知覚不可能」と言われている。それは「かつてどんな眼も見出すことができず、どんな感覚も知覚できなかった」ものであって、「純粋な火、あるいは宇宙の精気は、それが作用する、あるいはそれが結合するところの、何か他の物体を媒介してのみ (perceived

only by means of some other bodies) 知覚される」(S 159)¹⁵⁾。

次に、『サイリス』の生命原理が機械論的なものであるかを考えてみよう。先にも述べたが、純粋な火の作用様態の記述に際してしばしば用いられるのは、「浸透 (permeate)」「貫入 (penetrate)」「動揺 (agitate)」といった言葉であり、他方その被作用体に関しては「充満 (impregnate)」「封入 (imprison)」「内在 (lodge)」などの言葉が用いられる。これらが指し示すのは、機械論的粒子説が粒子の間の因果作用を記述する際に典型的に用いる、物体表面における「衝突 (collision)」ではないし、「衝撃 (impulse)」のような激しい瞬間的な運動伝達作用でもない。『サイリス』において、パークリーは、それ以前の著作では明示的に認められてこなかった微小粒子の存在を受け入れるが、そこで記述される粒子の作用様態は、明らかに機械論のそれではない。上記の「浸透」「貫入」「充満」などという特徴的な言葉が言い表すのは、固い粒子の衝突といった機械論的作用モデルではなく、むしろ流体的作用モデルとでも言うべきものである¹⁶⁾。つまり、物体内部まで滲入し、時間をかけて効果を及ぼす連続的作用なのである¹⁷⁾。

しかし、この流体的作用モデルは、ミクロレベルにおいて「引力」「斥力」によって、主として基礎づけられているように思われる。ニュートンは『光学』の「疑問」において、天体運動を説明する「引力 (attraction)」を微粒子の世界に拡張し、さらに微細な粒子がもつ反発しあう力としての「斥力 (repulsion)」をも付け加えた¹⁸⁾。ニュートン以後の物質化学の発展は、このニュートンの示唆から原動力を得ていた。『サイリス』も基本的にこの流れの上にある。パークリーは、「エーテル精気あるいは火がもつ活動と力 (activity and force) は、引力の法則によって、より粗大な粒子に分け与えられ、それによって生物体の営為を支える」(S 244)と言う。既に見たように、太陽光が物体の表面で引力によって一部が吸収され、他は斥力によって反射されて、物体の様々な色が現れ出ると説明したニュートンから示唆を得たパークリーは、植物の「香味」「香り」を同じように説明できると考えた。つまり植物は、太陽の光が含む射線を「毛細管」において「牽引し (attract) 吸収して (imbibe)」、その一部を取り込み他は排斥することによって、それぞれの植物に特有の香味をもつ樹液を作り出し、その樹液を全身に行き渡らせて生命を維持する。そして『サイリス』のパークリーは、こうした「引力」「斥力」による理解を、「機械論的」説明とは対比されるものと見る¹⁹⁾。つまり、「自然は、大きさや形やその他の機械論的原理によってよりは、引力と斥力によって、すなわちデカルトよりは、アイザック・ニュートン卿によって、よりよく知られ説明されるように思われる」(S 243)と言うのである。

最後に、『原理』60-66節で見た生命現象を生み出す生物の内的過程を記号論的に捉える立場が、『サイリス』でも維持されるかを検討しよう。だが、この点に関してパークリーの立場を正確に見定めるのは難しい。以下では、『サイリス』でも「記号」という言葉が使われ、

この点に連続性が認められるものの、しかしそこで「記号」とされるのは純粋な火であり、以上見た二点ゆえに両著作の記号論的生命論に実質的な連続性が認め難いことを示したい。すなわち、『サイリス』における「記号」は、もはや『原理』におけるように知覚可能な対象を指すものではなく、また機械論的法則に従って理解されるものでもないために、生命現象の記号論的理解の内実が変容しているということを論じていきたい。

『サイリス』において生命原理とされるもの、とりわけ純粋な火は、「不可視」「知覚不可能」とされる。『原理』第 65 節で「記号」と見なされた内的機構は「観念」であり（観念-記号論）、植物や動物の表層においては知覚されないが、表皮を切り開いたときには知覚されるものであった。これに対して、純粋な火が知覚不可能なら、もはやそれを「観念」として位置づけることはできないだろう。そこで純粋な火がどのような意味で「記号」と言われるのか、理解が困難となる。もし純粋な火が知覚不可能なら、いかにしてそれは「記号」でありうるのか。

『サイリス』でも「記号」という言葉が見える箇所は幾つかある。そのうち、特に注意に値するのは第 254、258、261 節である。第 254 節は、「記号とその表示物の間の自然的結合は、規則的かつ恒常的であるから、それはある種の理性的言説（a sort of rational discourse）を形作る」という文で始まり、これは『原理』第 30 節、65 節を直ちに想起させる。そこでは、「感覚の観念」が「規則正しい連結あるいは系列を成して」おり、これを「自然法則」と呼ぶと言われ（PHK 30）、また観念の結合は「記号」的關係であるとされた（PHK 65）。しかし『サイリス』第 254 節では、先行する第 152 節の参照が指示されており、それは（上の第三節、42 頁の引用を参照）「エーテルあるいは純粋不可視の火」が可視的世界を活気づける「世界の滋養的魂あるいは生命精気」とであると論じる一節である。したがって、第 254 節でパークリーが「記号」と言うときには純粋な火を指してそう言っており、「記号とその表示物の間の結合」とは、純粋な火と、それが生み出す結果の結合を指して言っているはずである。だがそうだとすれば、ここでの「記号」関係とは、一方が不可視の原因、他方は（純粋な火が作用した）可視的結果との関係を、記号とその表示物の関係としているのでなければならない。『原理』では、記号とその表示物の関係は「感覚の観念」どうしの間に成り立つ関係であるから、『サイリス』での「記号」の用法は『原理』でのそれとは明らかに異なる。同様のことは、第 258 節についても言える。そこでも、「道具、機会因、記号は、…可視的な自然の全過程を形成する」と言われ、同じ節の末尾を見ると、ここで言う「記号」もやはり「エーテル精気」を指していることが分かる。

そこで先に述べた問いに再び戻ってくる。『サイリス』の純粋な火、エーテル精気は、『原理』の「記号」と異なり、「感覚の観念」ではない。それは「かつてどんな眼も見出すことができず、どんな感覚も知覚できなかった」ものである（S 159）。そうであるなら、純粋な火はいかなる意味で「記号」とであると理解すべきであろうか。そもそも、『原理』でパーク

リーが挙げる「記号」の主たる機能の一つは、人間が経験を通じて感覚の観念の系列には一定の規則性があることを習得し、それによってあるものに他のものを表示させ「ある種の予見」を可能にすることであった (PHK 31)。例えば火の観念が、後に続く苦痛を警告する記号になるというように (PHK 65)。しかし純粋な火が感覚の系列の外にあり、後続の知覚を予示させる機能を担いえないなら、純粋な火を「記号」と呼ぶことに、いかなる意義があるであろうか。一つの可能な解釈は、純粋な火を「自然の創造主」である神にとっての記号として捉えることかもしれない。つまり、神に知覚されるものとして、純粋な火は、神が生命現象に法則性を与えるために参照する記号と考えるのである。しかしパークリーは、神が機会因のようなものに指示されるという考えに、一貫して否定的である (PHK 74)。これは『サイリス』でも同じであり、第 261 節に、エーテル精気は「創造者にとっての道具ではなく人間にとっての記号であると見なさなければならぬ」と言われる通りである。

したがって、『サイリス』でも依然として「記号」とは人間にとっての記号であり、純粋な火もその意味で「記号」なのであると理解すべきであろう。ここで再度、『原理』第 65 節でのパークリーの議論を想起しよう。そこでの議論では、植物と動物の内的機構は、観察可能な生命諸現象の法則性を担保する「記号」と言われていた。この意味での「記号」をパークリーは「根源的観念」と呼んだが、「観念」と言われる通り、それ自体で知覚可能なものである。そして知覚可能であるから、それは「予見」を可能にするものでもあった。つまり、生物体内部の各部分を構成する根源的観念とその表層部に見られる諸現象の法則的対応関係に基づいて、前者を操作し、あるいは調整することで、後者に変化をもたらすという実践的効用をもつ「記号」として機能しえたのである。さて、これに対して『サイリス』で「記号」とされる純粋な火については、知覚不可能である以上、そのような予示機能をもつ記号にはなりえない。しかしながら、純粋な火は後続する感覚的経験を「予見」させるという意味では「記号」とは言えないとしても、それにも関わらず、法則性を担保する役割を担うという意味でそれを「記号」と呼ぶことはできるのではないか。つまり、純粋な火は、それ自体は知覚不可能であり、それに基づいて生命諸現象を予見したり操作したりすることはできないが、それが存在すると仮定することによって、観察可能な多種多様な生命諸現象が法則性をもって生み出されることが理解可能になるという意味で、自然現象の理解可能性を担保する「記号」と見なしうるということである。

『サイリス』で純粋な火が「記号」とされるとき、それは予見可能性の「記号」ではもはやなく、ただ理解可能性の「記号」としてのみ考えられている²⁰⁾。ここで、純粋な火の認識論的な位置づけが問題となるだろう。純粋な火はそれ自体で感覚の対象にならないにせよ、あらゆる意味で知覚不可能というわけではない。つまり、「それが作用する、あるいはそれが結合するところの、何か他の物体を媒介してのみ知覚される」(S 159)。ここに言う「他の物体を媒介した」知覚に関して、『サイリス』の中にはほとんど説明らしいものは見出

せない。ただし、先に引用した第254節の後半部分には注目すべきだろう。この節では、「記号とその表示物の自然的結合」は「ある種の理性的言説」を形作ると言われていた。

…諸感覚に働きかけ、心によって知性認識される自然の現象は、…最も整合的で、心楽しませ、教え示すある種の言説 (Discourse) を形作る。これを生み出すために自然の諸現象は、最高の叡智に導かれ、調節され、配列されている。この言語あるいは言説は、様々に異なる注意力で学ばれ、様々に異なる程度の技能で解釈される。しかし人間がその規則を学び注釈し、そうして正しく解釈できる限りにおいて、人間は自然について知っていると言いうる。(S 254)

ここでは、自然現象が神によって語られる「言語あるいは言説」であるとされ、『視覚新論』以来のパークリーの「自然の言語」説が、『サイリス』の中で最も明示的に言及される一節である。しかし注目すべきは、この「言語あるいは言説」が「諸感覚に働きかけ、心によって知性認識される (strike upon the senses, and understood by the mind)」と言われていることである。こうした「感覚」と「知性認識」の間に引かれる明確な区分は、『サイリス』以前はほとんど見られない²¹⁾。この「感覚」「知性認識」の区分と、「様々に異なる程度の技能で解釈される」という後半部を接続させて考えるなら、感覚では捉えられない存在者、純粋な火という生命の原理を、知性が技巧的に「仮説」という仕方では知性認識する、という解釈が可能であろう。つまり、『サイリス』における純粋な火は、知性的把握の対象となる「仮説」的存在であり、感覚の対象とはならないが、感覚的对象から推論され、理性的思考において把握される。そして、そのような仮説的存在者が様々な生命現象の法則的理解を可能にする「記号」となる。

以上の検討から、『サイリス』では、『原理』における用法と異なり、「記号」は感覺的系列の中に現れるものではなく、それゆえ予見可能性の「記号」としてではなく、理解可能性の「記号」としてのみ機能するものであることが示された。つまり、『サイリス』では「記号」として扱われるのは不可視の純粋な火であり、したがってそれは感覚の対象にはならず、後続の感覺的経験を予示する機能をもたない。それにも関わらず、それが人間にとっての「記号」だと言えるのは、人間が純粋な火を「仮説」という仕方では知性認識することによって、感覚の対象となる様々な生命現象を一定の法則的秩序の下に包摂し、それらの現象を理解可能なものとすることができるからである。しかし、パークリーが『サイリス』において生命現象の理解可能性を担保する「記号」として純粋な火を論じるとき、『原理』第65節と比較して、生物の内的過程に対する彼の視線が、一段さらに奥の隠れた構造へ掘り下げられている点には注意しておくべきだろう。『原理』第65節では生物の内的諸部分を構成する「形、組織、機構」を「記号」として、生物体の内的構造と生命現象の関係が、少数の文字

を組み合わせる言葉を作るように規則的に組み合わせられ、観察可能な成長や運動を表す、という関係にあると言われていた。これらの「記号」は、それ自体で知覚可能なものであり、生物体の表皮を切り開けば観察される。ところが、『サイリス』の純粋な火は、人間の感覚が及ばない領域にある。それは太陽からの光と共に地上に達し、植物に吸引され、地上の生物体に取り込まれそれらを活気づける。それ自体は不可視であるが、生命現象の規則性がそれによって理解可能になるという、そのような生命原理としての純粋な火が、『サイリス』における「記号」である。

さらにもう一つ、『原理』第 65 節の議論と比較して注意を向けるべき重要な相違点に目を向けておこう。それは、純粋な火が「機械論的」法則に従わないので、『サイリス』の「記号」もまた、機械論的諸法則に従って結果や作用を表す記号ではないという点である。『原理』第 65 節では、規則に従って組み合わせ、諸現象を表す「少数の根源的観念」は、「形」「組織」であり、これらは機械論的性質であった。これに対して、既に見たように、『サイリス』における純粋な火は、「浸透」「貫入」「充満」といった流体的作用モデルに従って物体に作用し、この作用様態は、純粋な火の構成粒子のもつ「引力」「斥力」によって基礎づけられている。それでは、純粋な火が一定の法則によって結果や作用を指示する「記号」であると言われるのは、どのような意味においてであろうか。

パークリーは、純粋な火の構成粒子には様々な種類があり、それらはそれぞれ異なる法則に従うと言う。「純粋エーテル、あるいは不可視の火は異種の諸粒子 (parts of different kinds) を含み、それらは異なる諸力 (different forces) を与えられ、運動、引力、斥力、膨張の異なる諸法則に従い、他の物体に対して様々な異なる結合力 (divers distinct habits) をもつ」(S 162)。そして、運動や引力・斥力の異なる諸法則 (これらは「共感の法則」と言い換えてもよい²²⁾) によって、異なる結合力をもつ異種の諸粒子、純粋な火のアルファベットとなる微小粒子を、パークリーは「根源的粒子 (original particles)」²³⁾ と呼ぶ。「色だけでなく、香りや香味や、他の諸性質を生み出す根源的諸粒子は、…純粋な元素的火という普遍的根源的な培養基 (universal and original seminary) の中に、すべてが一緒になって含まれ混ぜ合わされている。この培養基から根源的粒子は、動物、植物、鉱物界の多様な基体 (subjects) によって、様々な仕方で切り離され牽引されるのであり、動物や植物や鉱物は、それによって各種へと区分され、特有の諸性質を備えることになる…」(Ibid.)。この箇所は、『サイリス』の中で繰り返し言及されるストア哲学的な「種子的ロゴス」、すなわち太陽が発する光に、すべての生命体を形成する「種子 (seeds)」となる粒子が含まれるとする説と結びつく。純粋な火に含まれる「根源的粒子」は、異なる種類に応じた「引力」「斥力」の諸法則によって、植物・動物・鉱物の多様な種に特有の諸性質や作用を生み出す「種子」であり、そのような法則の担い手となる「記号」なのである。

結語

パークリーの最後の哲学的著作である『サイリス』は、初期の代表作『原理』と比べて様々な解釈上の難問を孕む。しかし同時に初期の哲学にないその複雑さが、かえって魅力にもなっているとと言える。本稿では、『サイリス』を読み解くための哲学的枠組みを「生命哲学」に設定し、この視点から初期の非物質論哲学から帰結する自然観とは異なる自然観をそこに見定めようとした。すなわち、『サイリス』における「生命原理」、特に純粋な火を巡って展開される思考を、『原理』第60-66節の議論と比較し、現象主義的、機械論的自然観からの離脱、そして生命現象の記号論的な理解に関する相違に注目して考察した。

従来、パークリーの哲学と言えは非物質論哲学にほかならず、その哲学的立場を最も十全に表すカノンは『原理』であるという共通理解が、研究者たちの間で広く共有されてきた。しかし本稿は、『原理』の非物質論哲学には還元されない固有の哲学的枠組みが確かに『サイリス』にあるということ、「生命哲学」という視点を設定し、『原理』との相違点を明らかにすることによって示しえたと考える。『サイリス』という著作を特徴づける生命哲学は、自然界を生きた動物に喩え、そのような有機体としての自然全体を、宇宙的起源をもつ元素的存在者、純粋な火が経巡り浸透し、それによって万物が賦活されるものとして描き出す。この万物を生かす「生命原理」としての純粋な火は、それ自体では知覚不可能であるが、観察される多様な現象を生み出すのであり、植物に取り込まれて特有の香味を生む酸の精気を生成し、空気に弾性を与え、物体に揮発性を与え、または燃焼させる、というように可視的諸現象を成り立たせる根源である。この純粋な火は可視的自然を賦活する不可視の根源であり、『原理』の現象主義のうちには回収されえない。また、それは機械論的法則に従わないという点でも『原理』の自然観から逸脱している。さらに、純粋な火が「記号」として扱われている点に関しては、『原理』では「記号」が感覚の対象であり後続の感覚を予示するのに対して、『サイリス』で純粋な火が「記号」とされるときは、それは感覚と区別された知性認識の対象であり、生命諸現象を法則的秩序の下に理解可能にするものである。本稿は、以上の諸点について『原理』との比較により、パークリーの初期の非物質論哲学と異なる『サイリス』の生命哲学の独自性を探ろうとした。こうして『サイリス』に固有の哲学的枠組みが明らかになれば、次に進んで、非物質論哲学への従属という予断なしに、この「生命哲学」を新たな足場として、『サイリス』全体を解釈する可能性を開くことができるはずである²⁴⁾。

注

- 1) A. A. Luce, "The Unity of Berkeleyian Philosophy (I)," *Mind* 46:181 (1937), 44-52; "The Alleged Development of Berkeley's Philosophy," *Mind* 52:206 (1943), 141-56. ルース的な統一解釈の特徴は、バークリー哲学の絶対的カノン (主要著作) を『原理』に定めた上で、その核心的テーゼを「非物質論」とし、それ以外の著作やテーゼをその周縁部に位置付ける点にある。本稿は、このルース的視点から外へ踏み出すための第一歩となることを目指している。ルース的解釈とは別の視点に立って、『原理』から『サイリス』までの統一性を見出そうとする試みとして、David Berman, "Bishop Berkeley and the Fountains of Living Waters," *Hermathena* 128(1980), 21-31; idem, *George Berkeley: Idealism and the Man*, Clarendon Press: Oxford, 1994, chapters 5 & 7. バーマンは、バークリーの初期哲学 (『第三対話』の噴水イメージ)、中期のパミュエダ計画 (『アルシフロン』扉絵の泉)、後期の『サイリス』(タール水)を一貫する「水」のシンボリズムに注目している。
- 2) 『原理』と『サイリス』の断絶、及び新しい解釈の方向を最も早く論じたのは、おそらく次のウィルソン論文だろう (しかし、なぜかあまり参照されていない)。Catherine Wilson, "Berkeley and the Microworld," *Archive für Geschichte der Philosophie* 76. Bd. (1994), 37-64. より最近のものとしては、Timo Airaksinen, "The Path of Fire: The Meaning and Interpretation of Berkeley's *Siris*," in *New Interpretations of Berkeley's Thought*, (ed.) Stephen H. Daniel, 2008, pp. 261-281; Silvia Parigi, "'Scire per causas' Versus 'scire per signa': George Berkeley and Scientific Explanation in *Siris*," in *George Berkeley: Religion and Science in the Age of Enlightenment*, Springer, 2010, pp.107-19; idem, "Siris and the Renaissance: Some Overlooked Berkeleyian Sources," *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, T. 200, no. 1, (2010), pp. 151-162.
- 3) ここで「生命原理」と訳した 'principle of life' は、「光」「火」の元素や、植物の生命とされる「酸の精気」に対しては、「生命原質」という訳語が、むしろ適切であろう。しかし本稿では、地上の物体から発出される粒子や「光」「火」の「受容器」とであるとされ、それらを循環させる役割をもつ「空気」も 'principle of life' として扱う (これらは、光・火が他の粗大粒子と結合した混合媒体である) ため、「原理」と訳すことにしたい。
- 4) バークリーが『サイリス』で植物の機構やその科学について主として参照しているのは、ニーマイア・グリュー『植物解剖学 (*The Anatomy of Plants*)』(1682)、ステイーヴン・ヘイルズ『植物計量学 (*Vegetable Statics*)』(1727)、ヘルマン・プールハーヴェ『化学原論 (*Elementa Chymiae*)』(1732)、ニュートン『光学』(特に 1717 年の英語第二版) 及び『酸の本性について』(これはジョン・ハリス『技術百科事典 (*Lexicon Technicum*)』第二版に採録 (1710 年) された) である。その他の参考文献としては、オランダの数学者ベルナルト・ニウエンティットの『敬虔な哲学者 (*The Religious Philosopher*)』(1718) (もとはオランダ語で書かれ、アムステルダムで 1715 年に出版された) や、フランスの化学者ホンベルクの諸論文、ボイル著作集 (Peter Shaw 編、1727 年) も含まれる。
- 5) ここで言う植物の「魂」は、バークリー著作集第 V 巻の編者ジェサップが注意するように、「生命原理」という意味に等しい。Works V, Editor's Introduction, p.10.
- 6) Isaac Newton, *Opticks; or, A Treatise of the Reflections, Refractions, Inflections and Colours of Light, Based on the Fourth Edition London, 1730, with a Preface by I. Bernard Cohen*, New York: Dover Publications, 1952, p.396. (邦訳『光学』、島尾永康訳、岩波文庫、349 頁)。ニュートンとヘイルズの空気学の関係についての簡潔な解説は、次の二つを参照。R. E. Schofield, *Mechanism and Materialism: British Natural Philosophy in An Age of Reason*, Princeton: Princeton

- University Press, 1969, pp.68-79. 山本義隆『熱学思想の史的展開 1』（筑摩書房、2008年）、128-141頁。
- 7) ウェストフォール『近代科学の形成』（渡辺正雄・小川真理子訳、みすず書房）107-9頁に、メイヨウの実験の簡単な解説がある。酸素の発見は18世後半である。
 - 8) Newton, *Opticks*, pp.395-6. (邦訳『光学』、348頁)。この箇所でニュートンは、ボイルが想定したようなバネ状の粒子によっては、空気の凝縮と膨張を説明することはできないと述べている。
 - 9) ヘイルズの空気学についての解説は、R. E. Schofield, *Mechanism and Materialism: British Natural Philosophy in An Age of Reason*, Princeton U.P., 1969, pp.68-79.
 - 10) 「火」「光」「エーテル」という言葉は、「古代の哲学者たちによって互換的に用いられていた」(S 151)。第166節以降で、古代ギリシアにおける「火」の哲学が探索される。
 - 11) 「純粋な火」「元素的な火」はプールハーヴェに由来している。ニュートンのエーテル説に対しては、パークリーは両義的な立場を取り、光や熱の伝導媒質としての「エーテル」に対して否定的であるが、エーテルの様々な属性は「光」や「火」と同じであるとする。
 - 12) 「純粋な火」と「通常の火」を区別して論じたのは、プールハーヴェである。
 - 13) パークリーは、この純粋な火が地底の奥深くまで浸透していると言う。「この活気づける光のエーテルは、あらゆる場所に存在し、最も暗い洞穴の中にさえ存在する。このことは、多くの動物がそれらの暗い洞穴の中でも見ることができ、それら洞穴の中で物体どうしの衝突あるいは摩擦によって火が点火されうることから明らかである」(S 213)。
 - 14) Schofield, *Mechanism and Materialism*, p.148. 山本、前掲書、212-17頁。
 - 15) この引用の直後の文には、「化学者たちが、純粋な酸 (pure acid) について、それ単独では見出されない (being never found alone) と言うのは、純粋な火についても言うことができよう」とあり、これを「純粋な火はあまりに微小すぎるので知覚されない（したがって何か粗大な物体と結合した形でのみ [そしてそれが生む結果によってのみ] 知覚される）」と解釈することも不可能ではない。しかし、「十分に強力な顕微鏡を用いれば知覚される」という含意まで読みとることを正当化するテキスト上の根拠は、何もない。
 - 16) 「貫入」「充満」という言葉が表す流体的作用モデルは、ニュートンのエーテル説に端を発し、18世紀の物質理論では化学的作用を説明するために広く用いられた。ニュートンが『光学』英語第二版(1717)で導入した「エーテル」は、「空気よりもはるかに稀薄で微細であり、はるかに弾性的で能動的」なものであり、「すべての物体に浸透する (pervade)」とともに、また「(その弾性力によって) 全天空に広がっている」ものである(疑問18)。Newton, *Opticks*, p.349. (邦訳『光学』、310頁)。ニュートンによれば、物体は構成粒子の隙間(細孔)をもつのでエーテルは物体内部まで自由に侵入できる。山本義隆の指摘によれば、ニュートンのエーテル流体の説が18世紀の物質理論の発展において、熱流体説や電気流体説に結びついた(上掲書、177-8頁)。
 - 17) この点を指摘しているのは、Catherine Wilson, 'Berkeley and the Microworld', *Archive für Geschichte der Philosophie* 76. Bd. (1994), p.51.
 - 18) 次の『光学』疑問31にあるように、ニュートンが微粒子相互間に働く「引力」の研究を「実験哲学」の任務として規定したことが、ラヴォアジエとドルトンに至る18世紀物質化学の出発点である。「自然の中には、極めて強い引力によって物質粒子を密着させる作用者 (agents) が存在する。それらが発見するのが、実験哲学の任務である。」Newton, *Opticks*, p.394. (邦訳『光学』、347頁)。これに対して、ニュートンは「斥力」の担い手を極度に微細なエーテルのうちに見て、光の反射・回折や空気の膨張などの原因であるという見解を示唆した。

- 19) 「酸の精気」に関して、パークリーは、第 132-3 節で、酸の性質を酸の粒子の「形 (figure)」によって説明しようとするホンベルクの説を否定し、「最も固い物体の中にも突進し貫入し、振動させ分割する (rush towards, penetrate, shake, and divide)」、酸の「極めて強い引力 (vehement attraction)」によって説明する、ニュートンの説に与している。
- 20) ここで提示した解釈にとっての難点は、直前の第 252 節で、「自然の現象あるいは現れの中に一定の類比、恒常性、斉一性がある、これらは自然を知性認識するための文法」であり、この文法によって「自然の移り行く経過の中で何が生起するかを予見することができる」と言われていることである。これを見る限りでは、『原理』同様に『サイリス』でも理解可能性の「記号」と予見可能性の「記号」は分離されていないと読めるであろう。しかし、そのように読むと、第 254 節における第 152 節への言及をどのように解釈すべきかに関して困難が生じる。第 152 節の純粋な火は、「不可視の火 (invisible fire)」であり、それが活気づける「可視の物質全体 (the whole visible mass)」と対比されるものだからである。第 252 節と第 254 節を統合的にする一つの可能な解釈は、「記号」の読解に異なるレベルを区別することである。つまり、感覚の対象となる「現象」は、後続の他の「現象」を予見させる記号として機能する（自然の知性認識における最初のレベル）が、さらに進んで、多種多様な「現象」を包括的な法則の下に理解可能にするような記号、すなわち純粋な火のような存在は、もはや後続の現象を予見させる記号としてではなく、ただ現象を理解可能にする記号としてのみ機能する（自然の知性認識のより発展的なレベル）という解釈を採ることである。なお、付け加えて言えば、純粋な火を予見可能性の「記号」として解釈するために、それを〈原理的に知覚可能な〉対象（例えば、強力な顕微鏡を用いれば知覚される、など）と考えても役に立たない。なぜなら、たとえ純粋な火が〈原理的に知覚可能〉でも、現実には知覚されない限りは、他の現象を予示することはできないからである。
- 21) 『視覚論弁明』(1733) 第 42 節の次の一節は、感覚と知性認識との区分を述べる点で『サイリス』の第 254 節に近い。「知覚することと判断することとは、まったく別な事柄である。同様に、示唆されることと推論されることもまた別な事柄である。事物は感覚によって (by sense) 示唆されたり知覚されたりする。判断や推論は、われわれが知性によって (by the understanding) おこなうものである。」
- 22) 「共感」という言葉を明確に使用する箇所がある。例えば、「鉱物や植物の、微細で不可視の粒子との関係で [それらに対する反応で]、固体や流体、人間の身体の動物精気の中に、ある特異性や、共感、対立 (idiosyncracies, sympathies, oppositions) がある」と言われ、この共感と対立の法則は「隠れている (occult)」と言われる (S 239)。
- 23) この「根源的粒子」という言葉は、『原理』第 65 節の「根源的観念 (original ideas)」と対応関係にあり、したがって、そこで「根源的観念」について言われていた、文字を組み合わせて多数の意味を表すということを、純粋な火に当てはめて解釈することは、的外れではないと思われる。ただし、既に本稿で述べてきたことから明らかのように、火の粒子は「知覚不可能」であるから、「観念」ではありえない。
- 24) 本稿は、2020 年 8 月 27 日に開催された第 14 回ジョン・ロック研究会（オンライン開催）で読み上げた原稿に加筆訂正を施したものである（特に第 3 節と第 4 節を分け、新しい第 4 節の後半部分を新たに書き足して大幅な改稿をおこなった）。当日、研究会で質疑に参加して下さった方々にこの場を借りて感謝申し上げたい。また、本誌投稿に際して匿名査読者から寄せられたコメントを参考に、論述の曖昧さを除き、論旨を明確にするため幾つかの改善を施すことができた。ここに記して感謝の意を表したい。

文献

本稿におけるパークリーの著作からの引用は、*The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne* (9 vols.), edited by A. A. Luce and T. E. Jessop, Edinburgh: Thomas Nelson & Sons, 1948-57. よりおこなう。

パークリーの著作のうち、本文中で頻繁に参照した『人知原理論』『サイリス』の引用箇所を示すにあたっては次の略号を用い、その後に節番号を数字で示す。

PHK *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge* 『人知原理論』

S *Siris: A Chain of Philosophical Reflexions and Inquiries, Concerning the Virtues of Tar-water, and divers other Subjects connected together and arising One from Another* 『サイリス』

ENGLISH SUMMARY

Berkeley's Philosophy of Life in *Siris*

NAKANO Yasuaki

This paper draws out the philosophical framework inherent in Berkeley's last philosophical work, *Siris* (1744), from the perspective of a 'philosophy of life', showing that various features can be seen in the philosophy of *Siris* that differ from the immaterialist philosophy of *The Principles of Human Knowledge* (1710). The paper focuses on how Berkeley explains in *Siris* the 'principles of life' which actuate and enliven all things. First, referring to sections 60-66, I consider how the phenomena of life are explained in the phenomenalist framework entailed by the immaterialism of the *Principles*. Next, I turn to *Siris* and examine how Berkeley explains the acid spirit and air, which are considered the principles of life, and then observe the four basic features attributable to pure elementary fire, which is the fundamental principle of life. Furthermore, I would like to show that the principles of life in *Siris* go beyond the explanatory framework of the *Principles*. That is, while in the *Principles* the phenomena of life are understood according to the phenomenalist interpretation of mechanical philosophy, pure fire can no longer be captured in terms of phenomenism nor mechanism. Finally, I examine whether the semiotic understanding of the internal processes of living things as found in the *Principles*, according to which they are 'signs' of the phenomena of life, is maintained in *Siris*.

Key Words: George Berkeley, *Siris*, the principle of life, pure fire, sign